保育者を目指す学生の「歌の練習」についての実践報告

Practical report about the exercise of the song of the student to be a childminder

林　麻由美（東京福祉大学短期大学部）
Mayumi HAYASHI(Tokyo University of Social Welfare Junior College)

（要旨）

保育者を目指す学生は、子どもの歌のピアノによる「弾き歌い」を身につけるために、熱心にピアノの練習をする姿が見られる。では「子どもの歌」や「手遊び歌」の「歌う」練習についてはどうであるか。学生にピアノを伴わず、歌だけの試験を実施した結果、日常的に歌う子どもの歌であっても、歌詞を間違えたり、音程を正しく歌えない学生が目立った。そこで、学生同士で効果的な歌の練習について話し合い「グループ練習」を行なった結果、再テストでは大部分の学生が上達した。本稿は試験実施を含めた4回の授業の実践報告である。

（キーワード）

保育者、子どもの歌、練習、グループ、保育者養成校

1. はじめに

保育者養成校では、音楽系の保育表現技術としてピアノの授業が行われているが、ピアノを弾くことが全く初めての学生が少なくないことは、これまでも多くの研究者が調査している。林ら（2023）の研究では、ピアノ初学者の学生のピアノの実練習時間を採取したところ、あるフレーズを弾けるまでに教員の想定外の時間を要しているという事実が明らかになり、学生のピアノ演奏習得への困難さが浮かび上がった。併せて保育者にはピアノを弾くことだけでなく、ピアノを弾きながら歌う「弾き歌い」の技能も求められるため、ピアノ演奏だけで手一杯な学生にとって「弾き歌い」は、さらなる困難を抱えることになるだろう。

一方、保育者養成校の音楽表現系教員は、限られた時間の中で、学生たちが保育・教育現場での音楽表現活動ができるように、効率かつ効果的に音楽表現技術の授業を進めなければならない。このような状況の中、筆者は「弾き歌い」の指導法について、まだまだ課題が残されていると感じている。松本（2020）は、「勤務校の学生たちは初めのうち、弾き歌いの授業で大切なのは、ピアノ伴奏を弾けるようになることと考え練習時間の比重は伴奏に多くかけている」と述べている。筆者もこれまでの指導経験を思い起こすと、学生も教員も子どもの歌の「弾き歌い」において、弾きながら「歌う」ことよりも、ピアノ伴奏を正しく弾けるようにすることにウェートを置いていた。

しかし、園生活の中で子どもたちや保育者が歌う場面は、必ずしもピアノが伴っているとは限らない。ピアノ伴奏無しで歌う場面も多くあるからである。例えば、園で日常的に行われる「手遊び」や、屋外で歌う場合は、通常ピアノ演奏は伴わない。

このように生活や遊びの中で、子どもに寄り添って歌う保育者の姿や声は、子どもが心を動かし、何かを感じ取る大切な瞬間なのではないかと感じる。松本（2020）は以下のようにも述べている。「～子どもが歌う喜びを感じたりするのは～保育者のうたう歌声を聞いたり、うた

う姿、うたう様子を見たりすることを通してである」。これらから、筆者はピアノ演奏より、まず「声」での表現、つまり音楽表現においては「歌うこと」を第一に意識していくことが保育者にとって必要なのではないかと考えるようになってきた。

現在の勤務校で筆者の担当する「保育表現技術演習」の授業計画には、「手遊び」や「子どもの歌」を歌う時間を設け、クラス全員でこれらを行なっていた。そして、クラス全体で楽しく歌えて、良い雰囲気が作られれば良いと判断し、授業を進めていた。試験としては、本来の「弾き歌い」への前段階として、ピアノの片手演奏での弾き歌いを実施していた。当時は筆者もこの試験では、歌よりもピアノの片手演奏の評価を重視していた。

2020年度からは、コロナ禍でのオンライン授業やオンライン&対面の併用授業において、残念ながらコロナ以前のような全員で一緒に同じ空間で表現活動を行うことは不可能になった。当時筆者は、この授業はクラス全体で行うものであるという固定概念があり、Zoom画面越しでの教員の一歩通行に近い授業になってしまった。筆者はこのような授業では、学生の音楽表現技術を向上させることができないと感じ、授業方法の改善が必要であると省察した。

そこで2021年度からは、歌の試験と称し「手遊び歌」や「こどもの歌」の歌唱の課題を提示し、別室または Zoom のブレイクアウトルームを活用して、ピアノは伴わずに、学生一人ずつの歌を聴く時間を設けた。その結果、正しい音程で歌える学生が少ないということがわかった。合格に達しなかった学生達に対しては、対面またはオンラインので補習を実施していた。

2023年度は完全に対面授業となり、クラス全員で手遊びや歌唱活動ができた。このクラスは集団としては音楽的な表現力を持ち備えており、好印象を受けた。しかし筆者は、学生には一人の保育者として歌うことを、より意識してほしいと考え、前年度と同様に一人一人に「試験」を実施することにした。

2.「保育表現技術演習」2023年度歌の試験

(1)試験の概要

日時：2023年11月15日

対象学生：短期大学部2年生31名（うち欠席2名）

１週間前の授業時に以下を学生に伝達した。

課題曲:A どんぐりころころ（歌詞は2番まで）
　　B 大きな栗の木の下で(手遊び)
　　C やきいもグーチーパー(手遊び)
試験の方法: 別室にて一人ずつ実施する。
　　ピアノ伴奏なしで歌う。
評価の基準: ①適切なテンポであったか。
　　②音程が正しくとれていたか。
　　③手遊びが幼児にわかりやすく伝えられていたか。
　　④歌詞を正しく歌うことができたか。

本研究を行うにあたり、学生には歌に関する本授業と試験が研究の対象であること、また、個人が特定できないようにすることを説明し承諾を得た。

(2)「試験」の実施方法と結果

筆者は学生に、試験会場に入室した際、歌い始めに、学生自身の声に合わせた「ドレミファソ」までの音階を「ららら」で歌い、その後課題曲の3曲を歌うように指示した。以下は曲目ごとの試験の結果である。

・課題曲A「どんぐりころころ」

テンポに問題があった学生　2名
音程に問題があった学生　　2名
歌詞に問題があった学生　　15名

「どんぐりころころどんぶりこ」、「しばらくい

っしょに遊んだが」の部分の間違いが目立った。

・課題曲 B「大きな栗の木の下で」

音程が不安定な学生　　1名

テンポに問題があった学生　1名

手遊びについては子どもに向けてもう少しわかりやすく表現できれば良いと感じた学生が数名いた。

・課題曲 C「やきいもグーチーパー」

ほとんどの学生が最後から２小節目の下行する音階が歌えていなかった。正しく歌えることができた学生は28名中３名だけであった。

(3)試験後の学生へのアンケート

試験後、以下の「歌唱試験に向けての個人練習についての調査」を行った。(無記名　回収28名）質問と回答を示す。

① 試験に向けて歌の練習を行いましたか？

行なった：27名

行わなかった：1名

② 「行った」と回答した方、この１週間で何日練習しましたか

1日：6名

2日：8名

3日：10名

4日：3名

＊1回の練習時間はどれくらいでしたか？

10分：24名

20分：1名

30分：1名　　無回答：１名

＊練習内容を詳細に書ける方は記述してください。21名が回答（複数回答）

・運転をしながら口ずさむ：3名

・動画を見たり聴いたりしながら歌う：12名

・楽譜、歌詞の確認を行う：6名

・振りの確認をする：4名

・友達や家族の前で歌う：4名

③ 歌の個人練習は楽しいですか？

楽しい：16名

楽しくない：5名

どちらでもない：７名

④ 練習を「行わなかった」と回答した方、それななぜですか？

時間がなかった：1名

⑤ 試験の自己採点は？100点中何点ですか？

90点：5名　　85点：1名

80点：6名　　75点：3名

70点：5名　　60点：3名　　50点：5名

⑥ 試験で歌って感じたことを書いてください。

（27名が自由記述し、以下内容を集計した。）

・「緊張した」：10名

・「声が震えた、小さくなった」：6名

・思ったよりできなかった：5名

・音程を取る（アカペラで）のが難しい：4名

・上手くできた：1名

⑦ あなたは「歌」のスキルを上げる必要性を感じますか？

感じる：15名

必ずしも感じない：8名

わからない：5名

⑧ 歌の練習を行うとしたらどの方法が熱心に取り組めますか？

個人練習：7名

グループ練習：19名

どちらも当てはまらない：1名

無回答:1名

⑨ 歌の練習を行うとしたらどの方法が楽しく取り組めますか？

個人練習：3名

グループでメロディを歌う：7名

全員で合唱：15名、

グループでアンサンブル：3名

(4)アンケートのまとめ

試験結果を踏まえた結果と考察

・試験に向けて１週間で２～３日、1回10分程度の練習を行なったと回答した学生が多かった。

・試験で歌い「緊張した」と記述している学生

が多かった。
・個人練習よりもグループ練習の方が熱心に楽しく取り組めると考えている学生が多い。
・半数以上の学生が、保育者としての歌のスキルを上げる必要性を感じると回答した。

すでに保育実習や幼稚園実習など全て終えた学生達は、子どもの歌を歌ったり、手遊びを行うことに対しては慣れている様子が窺えた。しかし、28 名中 27 名が「練習」を行なったと回答しているものの、記述された練習の内容は、目標を持った「練習」というよりは、よく知っている歌だから、手遊びだから、「歌えることは前提で」歌詞やメロディや振りを自分なりに確認した程度にすぎなかったのではないかと推察する。試験では「どんぐりころころ」の歌詞を間違えて歌った学生が多く、「やきいもグーチーパー」の音程は悪かった。このようなことから学生達は、日常的に自身が楽しむ「歌」は別として、保育者として「歌うこと」の自覚がもっと必要なのではないかと筆者は考えた。

そこで学生達が「保育者として歌う」ことへの意識がもっと高められる「効果的な歌の練習」を次の授業の中で話題として挙げ、アンケートでの回答が多かった「熱心に、楽しく取り組める歌のグループ練習」について話し合ってもらうことにした。

3. 試験１週間後の授業（11 月 22 日）

(1)「効果的な練習方法」についてのアンケートと回答

この授業では、学生達に試験の全体の講評を伝えてから、「歌の効果的な練習方法」についてグループで考える時間を設けた。併せて２つの質問①②に回答してもらった。それらの結果と学生達がグループで話し合った内容③を示す。（回答 25 名）

① あなたは歌うことが好きですか？
好き：22 名
あまり好きではない：3 名

② 試験を行って何が難しいと感じましたか？（24 名が自由記述し、以下内容を集計した）
・ピアノ無しで音程を正確に取ること：18 名
・緊張せずに楽しく歌うこと：6 名
・出だしの音を決めること：4 名
・言葉のメリハリ：4 名
・リズム：4 名
・歌詞や振りを忘れてしまう：4 名
・ブレスの場所を忘れてしまう：3 名

③ 忙しい毎日の中で「歌」をどのように練習すれば良いでしょうか？

【グループでの練習方法：学生の意見】
一人がピアノを弾いてそれに合わせて練習する。音源を聴く。部分練習をする。皆で一緒に歌う。友達同士で音程が合っているか確認する。音程が合っている人を聴いて自分の違いを見つける。友達同士で発表する。どのように歌ったら良いか話し合う。歌い終わった後、改善点を出し合う。

【個人での練習方法：学生の意見】
ひたすら歌う。ピアノの音に合わせて歌う。歌をたくさん聴く。動画を見る、見ながら歌う。録音して音程が合っているか確認する。メトロノームを使う。メロディをピアノで弾く。カラオケに行く。日常的に口ずさむ。身体でリズムをとりながら歌う。他人（家族）に聴いてもらう。ポイントや気をつけるべき箇所を楽譜に書き込む。

【教員の指導・支援：学生からの要望】
間違っている音を指摘する。一緒に歌う。ピアノを弾く。メロディを録音し学生へ送る。
はじめに正確な音程とリズムを学生に聴かせる。改善策を提示する。

(2)「学生への２つの質問」「グループでの話し合い」に対しての結果と考察

大部分の学生は歌うことは「好き」であると

回答したことには筆者も安堵した。しかし学生はアカペラで歌うことが難しいと感じている。筆者はピアノを伴わずに音程を取ることに、学生が慣れていないのではないかと思いはかり、まずは音階を歌うことを提案することを考えた。

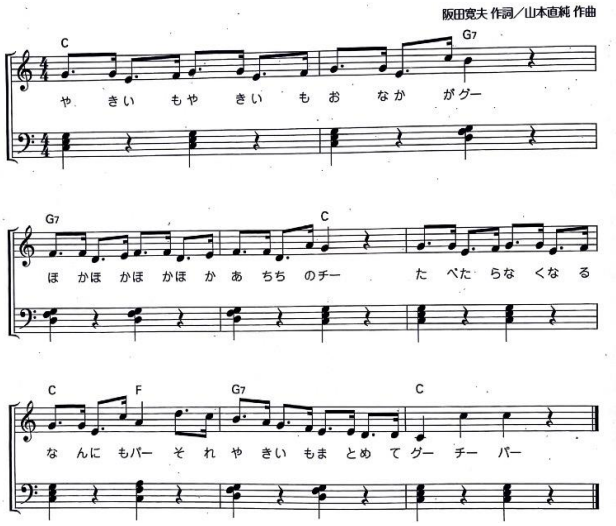
また学生達の話し合いの結果、次回の授業では、気の合う仲間同士で練習することに決定した。さらに学生達からは、教員への要望として、歌のメロディの録音が欲しいとの意見が出た。

4.試験２週間後の授業（11 月 29 日）

(1)授業の内容

「試験」では大部分の学生が「やきいもグーチーパー」の音程を正しく歌うことができなかったので、楽譜でどの部分が難しいのかを確認した結果、次の３点が挙げられた。（譜例１）

・３小節目の最初の音が取りにくい。
・６小節目の音階の下行形が付点リズムである。
・下行形音階の始まりの４拍目の音が主音の「ド」ではなくその一つ上の音「レ」から開始される。



（譜例１）やきいもグーチーパー

この後、全員で教員のピアノに合わせ、さまざまな音から音階の上行形、下行形を歌ったり、問題であった第６小節４拍目からの下行形の音階に付点をつけたり、つけずに歌ったりした。譜例はハ長調であるが、学生達が自身の歌いやすい調性を見つけられるように、教員は原調より半音や１音下げた調性であるロ長調や変ロ長調、１音上げた二長調でも弾き、学生はそれを聴きながら歌った。

次に、気の合う友達同志の７つのグループ（A～G）に分かれて 15 分間の練習時間を取った。教員はさらに、11 月 29 日（授業日）～12 月 6 日（授業日）までのグループと個人の練習を記録するよう促し、書き込める「プリント」を配布した。また 12 月 6 日の授業では、グループ練習の後、一人ずつ「やきいもグーチーパー」の「再テスト」を実施することを伝えた。

練習記録用のプリントに予め記載した事項は、11 月 29 日（授業日）から 12 月 6 日（授業、再テスト日）までの毎日の日付、練習した時間、内容、練習の参加者氏名、気づいたことや考えたことを書き込むスペースである。土日は個人練習についてのスペースを設けた。

また教員は、学生への支援策として、ハ長調、変ロ長調、イ長調の①音階上行形、②音階第２音からの下行形、③メロディの３点を録音して学生全員に送り、この録音を活用しながら練習するように伝えた。

(2)学生グループの練習記録

それぞれのグループのグループ練習日数と内容を示す。

A（5 名）:10～15 分間の練習を 3 回行なった。ピアノや教員の録音した音源を聴いて音を合わせた。

B（4 名）:授業以外にグループ練習は行なっていない。一人一人のキーが違うことに気づいた。

C（4 名）:授業と授業の間の 4 日間全て、20 分ほど教員の音源に合わせて歌った。録音された３つの調性を聴きながら

歌った。

D（3名）:4日間の練習日を確保し、グループ内で一人ずつ歌う練習を取り入れた。

E（5名）:4日間グループ練習を行なった。ピアノ、YouTubeに合わせて練習した。

F（5名）:2日間のグループ練習を行なった。動画を見ながら歌った。

G（5名）:4日間のグループ練習が記録されていたがメンバーの一人が、後日「実はグループ練習は授業中以外は行なっていない」との報告があった。

5.「やきいもグーチーパー」の再テスト結果とアンケート(12月6日)

授業の最初に10分程度のグループ練習を行なった後、一人ずつ別室にて再テストを実施した結果、当日の出席者30名中20名が正確な音程で「やきいもグーチーパー」を歌うことができた。そのほかの学生も前回に比べて上達していた。再テスト後、アンケートに回答してもらった。以下、質問と回答を示す。(回答 30 名)

① 歌のグループ練習は
楽しくできた：24名
楽しくなかった：0
どちらとも言えない：6名

② 歌のグループ練習は
熱心に取り組めた：15名
やや熱心に取り組めた：13名
熱心に取り組めなかった：2名

③ 歌のグループ練習を行った結果
以前より「歌う」ことへの意識が
変わった　：17名
変わらない：7名
わからない：6名

*「変わった」と回答した方、どのように変わりましたか

・みんなで歌うと楽しい。
・発音、音程を意識するようになった。
・歌うことが楽しくなった。
・前の音とどれくらい離れているかを意識するようになった。
・楽しく歌おうと思うようになった。
・正確な音程で歌えるように意識するようになった。
・１音ずつ音をとることが大切だと感じるようになった。

④ 歌のグループ練習を行い感じたこと、気づいたことがあれば記述してください。

・個人だとわからないこともみんなだと気づくことがある。
・一人で歌うより、楽しく歌える。心強い、安心感がある。感想を言い合える。
・お互いの音程を理解し指摘し合うことで正確に取れるようになっていくのだと感じた。
・以前より上達した。
・ピアノで音程を取りながら、みんなで歌うことでそれぞれが難しいところを理解して改善できた。
・ピアノで音程を確認しながら歌うことが大切だ。
・恥ずかしい思いもなくできたし、自分の間違っているところに気づいた。
・やる気になると感じた。
・一人ずつ歌うことで客観的に見ることができる。
・一人で歌うのとは全く違う。他の人の歌を聴いて歌うと合わせられる。それぞれの人の歌声の変化に気づいた。
・グループ練習で合わせて歌うことはやや難しい。
・周りが練習に取り組んでくれなかった。

6.考察

クラスの多くの学生はグループ練習を楽しみ、熱心に取り組んだと回答した。また学生達は、お互いを聴き合うことや、一緒に歌うこと、

話し合うことを通して様々なことに気づいたことがアンケート結果から窺える。その回答にもあるように、今回のグループ練習は、学生が恥ずかしがらず、楽しく、心強く、安心感を持って取り組める活動であったと考える。またグループの他の人の歌を聴いて合わせられるといったコメントや、音程が合っているか指摘してもらえるといったコメントもあり、グループ内で助け合っている様子も窺えた。これは一人で練習するより、聴いたり、聴かれたりすることで、以前より歌うことに意識が向いてきたのではないかと考える。このグループ練習やグループ練習を踏まえた個人練習の成果が、「やきいもグーチーパー」の再テストの合格者 20 名という結果に結びついたのではないかと考える。また学生の練習記録を見ると、筆者が録音したメロディや音階を聴きながら練習したとの記録もあり、これも学生達の練習の一助になったと考える。

これまでの結果から、学生達はグループで練習することで、楽しく、熱心に歌うことに向き合い、上達できる可能性があることがわかった。また、教員が事前にメロディの音源や音階を提示することにより、効率、効果的に練習が行われ、歌も上達することが示唆された。通常、音階や音程ついては音楽理論として、楽譜上で表わされる場合が多いが、実際に歌の演習を行うことによってこそ真に理解できるものであると考える。音階や音程の演習は、音楽教育家の髙田美佐子氏の著書『CD でわかるみんなの楽典』で、付属の CD と一緒に歌うエクセサイズによって示されている。また同氏は、フランスの新しい音楽教育である「フォルマシオン・ミュジカル」の講座においても「音階を歌う」ことの重要性について提唱している。

7. おわりに

今回学生達は、日常的に慣れ親しんでいる「子どもの歌」を、はじめはピアノを伴わずに歌うことに慣れていなかったと考える。しかし、グループ練習を通して「歌うこと」に向きあった結果、クラスの大部分の学生がピアノを伴わずに歌うことに成功した。これにより、グループ練習を実施したことは有意義であったと考える。

「歌う」ことは、人が日常的に行なっている行為である。それは自身のためであったり、他者に向けた表現活動であったりと様々である。

保育者が歌うことは、子ども達に向けた表現である。子ども達が、絵本や紙芝居のお話を興味深く聞くように、保育者の歌う子どもの歌や手遊び歌が、子どもの感性の育みに影響するのかということを考えながら行う表現であると考える。子どもたちが保育者の歌う歌に心を動かされ、その積み重ねによって感性が育まれていくことを、音楽教員であり音楽表現者としての筆者は期待している。

引用文献

林麻由美、田中功一、小倉隆一郎、鈴木泰山、辻靖彦「保育者を目指す学生の自宅ピアノ練習内容の調査 - 個人練習のすべての録音 MIDI データの分析から -」東京福祉大学･大学院紀要第13巻　第1-2合併号、 2023、pp.67-73.

松本晴子「手遊び歌と弾き歌いをどのようにうたうか」音楽教育実践ジャーナル 8 (1)、2010、pp.94-101.

参考文献

髙田美佐子　『CD でわかるみんなの楽典』ナツメ社、2012.

引用楽譜

鈴木恵津子　改訂『うたっておどっておもちゃ箱１』教育芸術社、2017.